

《2011年8月例会報告》

【日時】2011年8月26日（金）19：00～21：00（終了後は「ルン」～24：00頃）

【会場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）

【テーマ・演者】女子 W 杯を振り返ってー現地レポートと日独サッカー比較人間学

I. 日独サッカー比較人間学

加納樹里（中央大学文学部）

II. 2006年男子W杯との比較ードイツ社会は女子W杯をどう受け止めたか

浅野智嗣（エルゴラッソ）

III. 2011年女子W杯を振り返ってー大会運営を中心に

牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）

【参加者（会員）15名】浅野智嗣（エルゴラッソ）、阿部博一（日本サッカー史研究会）、牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）、加納樹里（中央大学）、北原由（青梅FC／武蔵野北高校）、熊谷建志（会社員）、笹原勉（日揮）、白井久明（弁護士）、関谷綾子（関谷法律事務所）、中西正紀（RSSSF）、中川英治（クーバーコーチング・ジャパン）、名方幸彦（文教教育トラスト）、中塚義実（筑波大学附属高校）、持永浩史（会社経営）、森政憲（早大大学院）

【参加者（未会員）2名】橋本綾子（サッカーファン）、早川絵美（会社員）

【報告書作成者】上野直彦

注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

女子W杯を振り返って

現地レポートと日独サッカー比較人間学

加納樹里（中央大学文学部）

浅野智嗣（エルゴラッソ）

牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会）

<目次>

I. 日独サッカー比較人間学（加納樹里）

加納樹里さんの自己紹介／指導者との関係（教育的視点から）／指導により有能感を高める方法／練習態度におけるメンタリティ比較／フィジカル面・戦術面について／ジェンダー問題からの視点／何を求めているのか？

<ディスカッション①> 指導者との関係／空間認知について／日独の女子の育成環境の違い

II. 2006年男子W杯との比較ードイツ社会は女子W杯をどう受け止めたか（浅野智嗣）

III. 2011年女子W杯を振り返ってー大会運営を中心に（牛木素吉郎）

<ディスカッション②> 大会全体の雰囲気／コパアメリカ体験記

○まず開会に先立ちまして…

牛木素吉郎さんが日本サッカー殿堂入りを果たされました。

牛木さん、本当におめでとうございます！

なお、掲額セレモニーは、日本サッカー90年式典の行われる9月12日（月）となっております。

I. 日独サッカー比較人間学

加納 樹里（中央大学文学部）

中塚：お手元の資料に、日本サッカー協会の機関誌の最新号に掲載された『日本女子サッカーの軌跡』があります。この中の年表を見てみますと、サッカー協会的には日本女子サッカーの歩みは1979年からとなっております。その年に日本女子サッカー連盟（現：女子委員会）が設立とあります。今日のお話はそれより前の頃から、そしてもっと本質的なお話が聞けるのではないかと思います。

加納：今は女子サッカーにはそんなに関わっていないのですが、長くドイツと日本、なかんずくサッカーには関わって来た経緯があるので、口火を切る形で話題提供させていただきます。

今日お話することは私の100%主観ですので、始めにその主観がどういう裏付けで出て来たのかを理解して頂きたいので、自分の紹介をさせていただきます。

○加納 樹里さんのドイツ・スポーツ（特にサッカー）との関わり

◇小・中・高・大学（～20代まで）

- ・付属小・高学年時 男子の練習に参加（数ヶ月）
- ・三菱ダイヤモンドサッカー観戦
- ・キックボードとボールだけの自主練??
- ・空っぽのスタジアム 「貴賓席での観戦」
- ・オフトレのサッカーに惹かれスキー部に入部
- ・日独スポーツ少年団同時交流事業・通訳（後4~5回）
- ・在独日本商工会議所勤務・Duesseldorf/AGON（バスケットチーム）
- ・順天堂大学大学院時代（スポーツ医学専修）の習志野FC

◇スポーツ医学専修後（以上30代前半迄）

- ・ケルン体育大学留学（87-89）とB.C.Efferen
～日本からのS級コーチ研修会に通訳同行～
- ・ドイツコーチ資格・Bライセンスの取得
帰国 ～1989年 日本女子サッカーリーグ（後のLリーグ）開幕～
- ・サッカー研究会（後にサッカー科学研究委員会）参加
- ・女子代表選手の体力測定等（東大研究生・兼任講師時代）
- ・日本女子体育大学コーチ・監督（1990～93）
- ・地元でのサッカーチームの設立（2002/45才時）
- ・ライプチヒ大学在外研究（2003）

通常サッカーとの関わり合いは20代までですが、私は殆どありませんでした。しいていえば付属小学校の頃、男子の練習に参加させられたぐらいです。ただし試合は出してもらえませんでした。

父親は中央大学のサッカー部の部長を長いことやっておりました。その影響もあって、「三菱ダイヤモンドサッカー」は父親と一緒に熱心に観戦していました。またその関係で、中央大のサッカーに貢献された小野さんのお陰で、天皇杯などはいつも素晴らしい貴賓席でサッカーを見ていました。中学の頃は団地に住んでいて、学校から帰ってくるとキックボードとボールだけで遊んでいました。

大学の時にはオフトレでサッカーをしていたスキー部に衝動的に入りました。その頃父から、FCジンナンという、東京で初の女子チームの存在を聞かされました。1976年だったと思います。ただ、さすがに一人で門を叩く勇気もなくスキー部を続けましたが、前十時靭帯を切るという怪我を負い、後々スポーツ医学を志すきっかけとなりました。

ドイツ語を専修していたので日独スポーツ少年団の通訳をやっている、ずっとチームに帯同し、日本やドイツを回りました。大学を卒業してから、在独日本商工会議所（於デュッセルドルフ）に就職、地元のバスケットチームに入りました。

唯一サッカーとの関わりは20代最後の大学院の頃、習志野のサッカークラブに入ったこと。その後、ケルンの体育大学に留学。ただ、習志野でサッカーの面白さに味をしめ、スパイクを日本から持参し、地元の女子チームに入れてもらいましたが、その頃で30歳でした。

私にとって非常に大きな契機になったのは、日本からのS級コーチの研修会に通訳として同行したことです。その中には現在の学芸大の滝井先生がいらして、食事をしてようが休み時間だろうが「通訳さん、通訳さん」と呼ばれて質問攻めでした。非常に熱心に勉強されていて大変だったのですが、その時初めて、サッカーに医・科学というものがあると知りました（笑）。

その頃ちょうど、帰国後スポーツ医学で身を立てるのは難しいと思い悩んでいた、その後1年間ぐらいいはケルン体育大学でサッカー関係の授業を取りまくるという状況でした。最後はBライセンスをドイツで取得し、帰国したのが1989年。それは日本女子サッカーリーグ（Lリーグ）が開幕した年でした。

ケルンにいた時に浅見先生、田嶋幸三さんと知り合う機会があり、そのついで、中塚さんも入っておられた「サッカー研究会」に入れていただきました。私はスポーツ医学・自然科学が専攻なので、女子選抜の体力測定を、東大の研究生をしながらさせていただきました。これが30代前半のお話です。

この後もサッカーと関わりがなかったのですが、2001年の頃、たまたま友達の子どもの女の子たちの面倒をみているうち、ママさん達が「サッカーをやりたい」と言い出しました。それで翌年、日韓W杯のブームにのって地元のチームを作りました。この時が45才でした。

ドイツとの接点という意味では2003年にもライプチヒ大学へ外研究に行く機会がありました。

※雰囲気把握して頂くには百聞は一見にしかず、このあと関連する写真をお見せしたいと思います
(画像とその説明は、本報告では省略)

○指導者との関係（教育的視点から）

サッカー選手に限らず、女性のアスリートは、指導者に依存しがちだといわれます。先日の朝日新聞には「なでしこジャパンはそうではなくなった」と書かれていましたが、前回のW杯では「監督のために勝ちたい」と言っていたそうです。一般的に、女子は指導者の言いなりなる、その通りにしたがる。全員がそうではないですが、メニューもその通りにやってしまう。傾向としてはあると思います。

あと顕著なのが、絶対にエコ鼻根は許されない。なでしこも、いい意味で協調性があってあれだけ頑張れたと思いますが、足並みを揃えると、ある意味では、均質的な集団になってしまいます。そこに異質な人、例えば女子サッカーに「中田」のような存在が入ったらどうなるのでしょうか？ また

今後どういうふうになっていくのでしょうか？

○指導により有能感を高める方法

資料にあります、指導により「有能感」を高める方法についてです。「身体的有能さの認知」「統制感」「受容感」の3因子は、全ての項目でドイツの大学生の方が高い。また、指導行動における「指摘」「助言」「賞賛」「励まし」で比較した時、日本よりドイツの方が褒める。しかしドイツより日本の方が沢山励ます。私も大学で教えていて、しばしば学生から聞くのは、「できないのに頑張れと言われる」ということ。日本の指導はどのようなバランスでやっているのか？ まだまだ巷で小学生に指導している人で、怒鳴りちらしている人は圧倒的に多いと思いますし、一方で訳もなく「頑張れ、頑張れ」しか言わない人もいます。

○練習態度におけるメンタリティー比較

「有能感」に関して私が思うのは、ドイツで教えている時に、生徒たちは堂々としている。もっと言えば偉そうというか(笑)。例えば、下手な生徒はみんなに迷惑かけるから日本では遠慮しがち。ところがドイツは、「私は下手なだから、もっといいボールをくれ」とか、「上手くないんだから、ゴール前で待っているから得点だけさせてくれ」とか、図々しいと感じてしまうくらい練習態度は堂々としている。

ライブチヒでは授業のサッカーにドイツ的強引さで参加していましたが、私よりもっと下手な女子、ハッキリ言って邪魔なくらいの子がいました。そして男子との試合で GK をやっていたら手を骨折しました。さすがにもうやらないだろうと思ったら、翌週ギブズをはめてきて、またやると言う。ここで普通、日本の教員だったら、止めなさいと言いますが、ドイツ人の教員だと、本人の判断を優先させます。

私自身もケルン体育大学時代、スキー実習の時、日本的遠慮でレベルが下のクラスに入ったら全然合わず、こんな遠慮はしてはいけないのだなと感じました。

あと練習中の態度ですが、これは昔から言われていますが、練習の集中力というか、練習から厳しくというのがあります。練習中、下手でも動ける私にスタメンを取られると思った女子が、後ろから蹴ってくるんです。最初はふざけてると思ったのですが、本当に蹴ってくるんです。ビックリしました。当時ドイツにいた風間八宏さんに聞いたのですが、2部のチーム練習の中で、本当に生死をかけて戦っている状況なんだと言われていました。女子でもというのには、さすがにびっくりしました。

あと、「基本を徹底的に」とは、昔からドイツ人のメンタリティーとして言われているのですが、本当にその通りです。日本のコーチの方が来られて、通訳として帯同すると、「面白くないね」「別に変わったことやってないね」と言われます。確かにその通りですが、ただ、その同じ練習を徹底的にやっているんです。また、個人的には、日本人のセンタリングは甘いと思っています。例えば大学生のレベルでも、オーバーラップして上手くセンタリングを上げれば「ナイストライ！」とか褒められますが、ドイツだったらそれがピンポイントに合って得点しなければ褒められません。まして、フリーで上げたセンタリングがピンポイントで合わないのは考えられないと言います。たとえその前のプレーがよくても、それはダメなんです。結果がどうなったかが重要なんです。

だから、今はだいぶ変わりましたが、良くも悪くもドイツのサッカーが面白くないと言われるのは、結果だけを求めるからだだと思います。結果とはつまり、ゴール前の攻防を重視するということです。

○フィジカル面・戦術面について

女子特有の戦術というのではないと思います。ただドイツは、何故かスライディングが上手かったです。それは芝生のピッチで育つからだと思いましたが、体育館でもやるので関係ないようです。

また、女子選手のパワー・トレーニングは未開拓というか、まだまだ向上の可能性はあると思いま

す。ケルン体育大学の女子代表をみている先生から話を聞く機会があったのですが、「女子選手は30mのスプリントでまだいくらでも速くなる」と、実際のデータを見てお話を聞きました。あと、女子選手は、追い込んでも余力はあるという佐々木監督の記事を読みました。男子は授業でしかみたことがないので、私にはコメントできません。

私は「サッカーを見る」機会が長かったわけですが、性差を感じるのは、オープンスペース（空間認知）の認識が、大学生のレベルですが、男性より少し劣るかなと思います。ただ基本的に、戦術で男女差があるとは思いません。

○ジェンダー問題からの視点

ピッチの中と外で多少役割を変えないといけないと思います。現代は性差をいう時代ではなく、女性も逞しく強くなりましたが、多くの方は、女性がピッチの上で戦うのと同じ様に振舞うのを好意的にはみてくれません。男性と違って、そこはうまく切りかえないといけない。

あと、この話はあまりしたくなかったのですが、日本のリーグでもドイツでも、女性同士で住んでいるということがありました。

女性指導者が一概にいいとは言えませんが、女性指導者を育てていく必要はあると思います。ある有名な日本人女性指導者の記事を読んだのですが、彼女は選手に対し「髪を長くしなさい」と言っていました。そんな事は勿論本質的なことではありませんが、色気(?)のあるアメリカ選手の真似をしているようです。ピッチの中と外を分けるための試行錯誤でそうなったのかなと思います。

またご存知の方も多いと思いますが、アメリカには「タイトルIX」という法律があります。アメリカの部活動において性差をなくするというものです。これはお恥ずかしい話ですが、私が勤めている大学でも、女子のスポーツ推薦があるのは陸上部と卓球部と射撃部のみ。ラククロスなどは、体連には加盟していますが、スポーツ推薦はないという状態です。女性のスポーツの場はまだ格差があると思います。

結婚してから競技生活を続けられるかどうかですが、今の日本ではご主人の協力如何にかかっていると思います。ある意味、日本の男性は働きすぎ。働き方の質が変わってくれば、そのあたりも変わってくるのかなと思います。現在男女問わず、競技年齢は長くなっていますので、女性にも、結婚してからも競技を続けていく可能性を与えてほしいと思います。

○何をもとめているのか？

ひとつは、トレーニングに性差がないということ。もうひとつは、日本ではスポーツ文化は男性のもの。特にスポーツの組織は100%とっていいくらい男社会だと思います。子供と女性は以前よりは機会に恵まれてきましたが、まだまだ限られています。

この写真（「Women's Soccer」 The Game and The World Cup, Universe Publ.より引用）は、かわいくて気に入っています。以前C級のコーチ研修で「女性のトレーニング」という科目を担当していた時、この写真を見せて、スポーツは誰のものかという話をしていたら、ラモスさんが生徒でいらして、「先生、テストに出ない話をしないで下さい」と言われました（笑）。



結論なのですが、なでしこが今後どうなっていくか注視していきます。

なでしこに限らず、女性のアスリートはインディペンデントの道を模索してほしいです。自立性というか独立性というか。男性からみると可愛げないとなるのでしょうか、それがないと世界では戦っていけないと思います。一時的にはコーチの力で戦えるかもしれませんが、長い目でみたらそうしないと一流にはなれないと思います。

私が思いついたお話をさせて頂きました。
今日は有難うございました。

(参考文献・参照)

- 1992 ドイツのスポーツ教育と指導者養成 (中央大学体育研究)
- 1996 一流女子サッカー選手の体力評価とその活用法に関する研究 (中央大学体育研究)
- 2005 ライプチヒ大学スポーツ科学部 (在外研究報告) (中央大学体育研究)
- 2006 *Elegant and on the Offense –Women’s Football in Eurpoe* (日本フットボール学会国際誌)
大住良之・大原智子「がんばれ女子サッカー」岩波アクティブ新書
「Women’s Soccer」 The Game and The World Cup, Universe Publ.
- 朝日新聞記事 “ピッチの中がきめる” 2011/08/20

<ディスカッション①>

○指導者との関係

中塚：指導者との関係のところ、前回W杯の時に選手は「監督のために頑張った」と言ったという話がありました。それは、「東洋の魔女」の頃から、日本の女子スポーツにはずっとある感覚だと思います。ただ今回の「なでしこジャパン」は、今までの日本の女性スポーツ集団とは違う印象を持ちました。監督のためでなく、自分のため、自分たちの環境のため、あるいは後輩のためというのを、彼女たちのインタビューの受け答えから感じました。今回は、前回大会のときとは異なる考えの人が増えたのかなと思いました。

加納：前回と共通のメンバーもいますし、今回は何かあったのかと。

牛木：私が取材した印象では、佐々木監督のためというのは全く感じなかったです。選手たちは監督の言うことに無条件で従うようなことはないようですから。例えば第3戦目のイングランド戦ですが、日本はベスト8進出を決めているのだから、疲れている主力選手を休ませて1.5軍で臨んだほうが良いと考えました。しかし女子サッカーを長く取材している人から、それは選手層が薄いから崩れますと言われた。佐々木監督は、3戦とも同じメンバーです。結果は敗北。メタメタに疲れていた。それで次の試合どうなるかと思っていたら、ちゃんと出来ている。それは、澤が、練習量が多すぎるから減らしてほしいと監督に直言したらしい。それは澤の意見ではなく、他の選手の意見を代弁したものだそうです。1964年東京オリンピックの女子バレーボール監督の大松監督や次の山田監督のころは、選手が監督にそんなことは言えないです。時代と共にメンタリティも変わってきている。また決勝の延長戦、川澄選手が監督にポジションチェンジを申し出て、その通りにした。選手も意見するし、監督も、若い女性に言われてもそれに耳を傾ける。そういうふうに変ってきている。

名方：女性は徹底的に鍛えてもまだ余裕があるとおっしゃいましたが、どのような意味ですか？

加納：資料の記事の中に書いてあります。昔から言われている、女は「ダメだ」と言ってからが勝負ということです（笑）。男性よりも早目に、予備力を残してからギブアップする。それは多少私も思いますが、男性を指導したことがないのでノーコメントです。佐々木監督も、女性はある程度追い込まないと逆にダメなんだと言っています。

牛木：佐々木監督は、放っておくと練習させすぎになるらしいです。そのあたりは少し古い部分があるのかもしれませんが。

北原：帝京だから

—参加者一同（笑）

阿部：古沼先生が「ビバ！サッカー研究会」に来られて、今のサッカーは練習が少なすぎると言われてました。

○空間認知について

牛木：空間認知とはどういうことですか？

加納：自分のポジションを俯瞰的に見るということです。うまく言えないのですが、自分が動いていて全体を見てどこにスペースがあるかを知る感覚でしょうか

参加者：以前あった、「地図が読めない女」のようなことですね

白井：慣れか経験もありますよね。設計の世界でも、女性は平面認知ができるが立体認知は落ちるというような。でもそれも経験かもしれないが、よく言われる。

牛木：それは個人差じゃないですか？

白井：その可能性もあるんですけどね。一般論ではよくいわれます。

加納：脳の生理学の研究者に言わせると、女性は道に迷ったらメルクマール、ここに何があったかで覚えている。男性はどのような方角から来たかを俯瞰的に考えているそうです。

中塚：体育の授業をやっていて感じる場合があります。男女ともサッカーの授業があるのですが、女子は、グラウンドが全部空いているときでも、狭いところでゴミゴミと集まってパス練習をやっていく。「あっちが空いてるから行かんか〜」と言われてようやく気付く。しかしこれも経験かもしれませんね。

参加者：小さい子とサッカーやっていると、そうなりますよね。

加納：キック力の差があるので、サイドチェンジも限られているという面もあります。

北原：僕は岩渕選手がU-12の時、東京都で教えていたことがありまして、4対4の試合の時に、彼女

はゴール前にしかいない。そして得点王でした。私はここにいるから、中で点取ってやるからというプレーをしていました。それを今思い出しました。

加納：日本代表も今後、他の国は日本の戦術を真似てくるでしょうから、パワーで押されたりしてくると思います。そういう時に個性的な選手が必要になってくる。それをチームの一員として組み込んでいけるかがネックになってくる。

○日独の女子の育成環境の違い

白井：ドイツでは子供の頃、男女別々にやっているのですか？

加納：今はそんなことはないと思います。

白井：日本では小学生年代で女子は男子の中でやっているから強くなっているといわれていますが。

加納：今はどうかは知りません。

笹原：日本ではエコ鼻肩は許されないという話がありますが、ドイツも同じでしょうか？

加納：日本のほうが強いと思います。それはチームの和を重んじるからだ。男女だと女性のほうがより顕著だと思います。それはもしかしたら男性が指導しているからかも。ただ女性が指導したら、もっと怖いかもかもしれません。

中塚：そうですね…(笑)。なんかロールモデルとなる女性の指導者が限られていると思います。熱血タイプしか思い浮かばないじゃないですか。

加納：ええ

阿部：ケルン体育大学の男女比はどうでしたか？

加納：男性の方が多いですね。ただ体育大学の領域がスポーツマネジメントなど幅が広いので、全部をみると性差はありません。

II. 2006年男子W杯との比較—ドイツ社会は女子W杯をどう受け止めたか

浅野 智嗣 (エルゴラッソ)

2006年のドイツ男子W杯と今回の女子W杯の両方に行ってみて、どういう風に「街(マチ)」が違ったのか、というのをサポーターの視点で話していきます。

国際大会の際、サッカー観戦はもちろん重要なファクターなのですが、同時にマチがどのように騒いでいるのかをウォッチングするのが好きなんです。ここで言っているマチの私的定義なのですが、東京といえば東京タワーとかそういう観光的な意味ではなく、W杯の開催地としてどういう風なフットボール的なお祭りのスペースになっているかなのです。つまりマチを、フットボールを題材とした異文化コミュニケーションの場所として捉えています。そこに接するのはW杯の観戦以上の楽しみと

なっています。

マチ（お祭り）の楽しみ方ですが、私は日本人ですよ、日本の選手を応援に来ていますよ、と相手の方に分かってもらわないと意味がありません。もしくは相手からもお話をさせていただきたい。そのために衣装に工夫をこらします。

まず2006年ですが、これはハーフタイムです。青の柔道着です。

これは今回です。一緒に写っているのは妻と妹です。行ったのは2戦目と3戦目です。



Tシャツに、決勝は日本対ドイツですよと書いていたら、これがドイツ人に大うけしました。こんな感じでコミュニケーションのきっかけを掴んでいます。

ここから本題なのですが、まずスタジアムの比較です。

まず今回は非常に家族での観戦者が多かったです。

これはレバークーゼンで行われた試合なのですが、僕の隣にいたお母さんと息子さんです。

息子さんは韓国から養子にもらった子供らしく、ドイツでもめずらしくないそうです。地元のご夫

婦とお子さんという割合が非常に多かったです。

次はアウグスブルグなのですが、真ん中にあるイングランドを着ているご婦人はミュンヘンから来ていたそうです。今回は外国からの観戦者が少なかったと思います。ちなみに日本のハチマキを巻いているオジサンはイタリアから来ています。

これもアウグスブルグですが、このご夫婦も地元の方です。イングランド系の方らしいですが、日本のユニフォームを来ています。家族観戦だとほんわかした感じなのですが、今回のW杯はドイツ在住の方でもどっちな応援をしていました。



ではスタジアムの周辺はどうか？ 2006年の時と何も変わらず非常に楽しいものでした。

こちらはケルンの大学に通っているスコットランド人、こちらはドイツ在住のメキシコ人です。

マチはどうかというと、ほとんどW杯の匂いはしていません。

観光でシンデレラ城に行きましたが、日本のユニを着ていましたが、外国の観光客が沢山いましたが誰からも声はかけられませんでした。

これはミュンヘンのマリエンプラッツという広場です。僕が行った翌日が冬季五輪の開催地が決まる日だったので投票一色でした。ですので、マチにはW杯の匂いはしませんでした。

まとめになります。どちらのW杯が楽しかったかという点、資料に「誰もが真剣な 2006 年、微笑み・ホスピタリティの 2011 年」と書きました。2006 年はドイツ全体がお祭りで、自分の国が勝つために一生懸命応援していましたが、今回はスタジアム周辺だけのW杯でした。

例えば、試合のあったアウグスブルグ近くの大都市ミュンヘンでは、まったくW杯の雰囲気は感じませんでした。

ただ感じたのは、スタジアム周辺とマチの、サッカー用語でいうと緩急の格差が、かえって居心地がよかったです。どういうことかと言うと、その格差があるので、スタジアムでの楽しみが倍化したような気がします。と同時に、それでも来てくれるドイツの人たちは、異邦人を暖かく迎えてくれる感覚がありました。

2006 年がダメという意味ではなくて、今回はホスピタリティ・家庭的なイメージを受けて帰ってきました。

(本報告では大部分の写真を省略。以下の画像・Blog に掲載されている)

◇画像・Blog の紹介

http://tokiokas.fc2web.com/negot/1107_germany/index.html

<http://blog.livedoor.jp/tokiokas/>

Ⅲ. 2011 年女子W杯を振り返って－大会運営を中心に

牛木 素吉郎 (ビバ！サッカー研究会)

最初に新聞の話をして。これはドイツ女子W杯決勝翌日の新聞です。これに大変感心したのは、一面は「なでしこジャパン、我々は心からお祝い申し上げる、おめでとう…ヤッカミなしで。あなたがたはそれに値する」。すばらしいインテリジェンスを感じる新聞だなと。ところが裏面はポルノだった…。ドイツはこういう新聞でも、サッカーに関しては格調高いということです(笑)

こちらは本当の高級紙ですが、2 日遅れでの紙面で、東京の人が「なでしこ世界一」という号外を読んでいる写真を掲載しています。こういう面白いものを最初に紹介しておきます。

今度の大会が、同じドイツで開かれた 2006 年の男子ワールドカップとどう違うかという点、それは中小都市での開催が多かったことです。資料に、開催された 9 つの都市の一覧を載せていますが、大都市はベルリンだけです。これはドイツ統一の象徴の都市として、開幕試合を一試合やっただけです。ドレスデンは旧東ドイツですが、これは中小都市です。治安もあまりよくないのですが、旧東側でやるのが、統一ドイツとして意味がある。フランクフルトが 2 番目に大きな都市なのですが、中都市です。ドイツはあまり大都市がありません。20~40 万の都市で、資料にある中小都市のネットワークで女子の試合は行われました。これは今までのワールドカップになかったやり方でした。

また浅野さんが言われたように、ナショナリズムの熱気がない。だから、とても気持ちのいい大会でした。ベルリンのような大都市の試合でも、家族連れや女性だけで来ている観客が多かった。これがこの大会の特徴のひとつだと思います。

男子のW杯は、今まで 11 回連続で見してきました。女子は今回が初めてですが、非常に理想的な国際的なスポーツ大会だと思いました。なぜそれが可能になったかという点、IC や ICE など交通の発達もあります。また通信も、全国の都市で同時に情報を引き出せるので便利でした。アウトバーンなどもあり、宿が離れていても問題がない。街自体が自分たちの力で、ボランティアのサポートなどで開催

を運営している。ドイツも高齢化社会で、年配の方がボランティアとわかる表示をつけていました。それを楽しんでやっていました。また記者会見でも、ドイツが負けた時でもきちんと質問します。どこかの国なら負けたらスペイン語でじゃんじゃん、監督を非難する質問がありますが（笑）

地方都市のスタジアムは、大体2万人レベル。改装したものもありますが、理由のひとつは、屋根の拡大。もうひとつはコンピュータの発達によって施設を新しくするためです。コンピュータの発達により、我々の取材方法も変わりました。例えばフィールドの周りにカメラマンがいますが、そこにインターネットの端末がきている。通信社のカメラマンは、そこに繋いで、シャッターを押したらさっと送ってしまう、そういう時代なんです。国立競技場にそれはないので、いまのままではワールドカップはできないですね。

ジンスハイムという街は人口13万くらいですが、そこに2万人のスタジアムがある。3位決定戦で行ったのですが、市街地は駅を中心にして半径200mです。その周辺は丘陵地帯で、歩いて20~30分のところにスタジアムがあり、ブンデスリーガのチームがあります。またコンコルドの実物大が常設展示されている航空博物館などもあります。

ドイツは中小のクラブでいつもやっている運営を、W杯でやって楽しんでいる。そういうスポーツ文化の成熟のようなものを感じました。例えば、番狂わせがあってドイツが負けて日本が勝っても、みんな、かつて男子でそういう番狂わせがあったのを知っている。日本の最近のサポーターは、釜本選手すら知らない（笑）

スポーツ文化が日本国全体では育ちにくい。それは、ドイツでは普段から毎日クラブへ行って、顔つき合わせてお茶飲んだり、奥様方は編み物やったりしている。男はサッカーやってビール飲んでい。そういう顔をつき合わせた交流の中でスポーツ文化が育って、中小都市でも2万人の競技場を持って運営できる。運営側も、必ずしもサッカーだけでなく、バスケットや水泳やってる人もい。これが今大会の特徴だったと思います。

今、東京がオリンピックを招致しようとしています。オリンピックは30競技（スポーツ）以上、400種目（イベント）以上を狭い都市の中に詰め込んで、コンパクトに運営するのがいいのだということを行っています。オリンピックは、よくない大会なんです。それをやろうとしている都知事の石原慎太郎さんは、僕と同年代で一橋大のサッカー部でした。昔のことを思い出して反省したほうがいいと思います（笑）。

最後に一つ提案を述べさせていただきます。オリンピック招致や国民体育大会開催はやめて、地方の都市がみんなバラバラにいろんなスポーツをやって、それをネットワークでつなぐ。そういう形で大会を開いて、そういう形で日本のスポーツを発展させる。日本のスポーツが、地域で発展するように12年計画をたてる。そういう計画を提案します。なぜ12年計画かというと、女子のワールドカップを日本でやろうと思うのですが、4年後はカナダ開催が決定している。8年後はラグビーのワールドカップ日本開催とぶつかる。それで12年後の2023年なんです。これは2024年のオリンピック開催が東京に決まると、オリンピック準備とぶつかる可能性がある。だから東京オリンピックは絶対に阻止しなければならない（笑）。

<ディスカッション②>

○大会全体の雰囲気

阿部：あともうひとつ、現地に行かれた方がおられます。

早川：私はケルン滞在で、3泊5日でボーフムとレバークーゼンに行ってきました。ケルンは町の中心の広場に参加国の旗や立て看板などが掲げられていました。街中では、ドイツの試合がある時はドイツ国旗が掲げられていて、意外と盛り上がっているのではと感じました。2006年とは違い

ますが、2007年、カナダで開かれたU-20世界選手権にも行きましたが、それと似ていると思いました。現地で印象に残っているのは、選手・監督の紹介が全て動画になっていることです。得点するとさらに動画が流れます。日本の選手以外はみんな綺麗にお化粧していました（笑）。私が日本人だと分ると、南米あたりの人から、澤選手を紹介しろと言われ、やはり澤さんは人気があるのだと思いました。

牛木：その動画は新しい工夫ですね。この大会では全国規模でやってましたね。技術は前からあるけど、日本だとFIFAから言われたままやる。自分たちのアイデアで自主的にやるのがドイツの良さですね。

早川：ただ日本のテレビでは流れてないんですよね。

牛木：流れてないですか？

早川：流れてないです。

牛木：まあ、実物と違っていう説もある（笑）

中西：確かコパ・アメリカでも見たことがあるような気がしますが…

浅野：Jリーグはやってます。半分くらいのチームがやってるんじゃないですか

早川：意外と名前を覚えてくれるので、あれがいいなと思いました。あとパンフレットが安く、オールカラーで2ユーロでした。

牛木：これはキッカーの特別号で、こちら女子サッカーの歴史が書かれた書籍です。

加納：アウグスブルグの書店に入りましたが、少しですが女子サッカーのコーナーがありました。ドイツの後にリバプールに行ったのですが、あまり放送はされてませんでした。ドイツは開催国ということではありますが、特別番組も組んでいたし、暖かい目で見てくれてはいるのかなと思いました。あと、ご指摘があったアウグスブルグでは、なでしこが一番まずいサッカーをしたのですが、結構日本を応援に来ている人がいました。日本のパスサッカーを見に来たのに、今日は残念だったというドイツ人が多かったです。日本に対しても暖かかったですし、女子大会ならではのアットホームな雰囲気だったと思います。

牛木：ドイツのお客さんはマナーが良くて、ドイツ以外のチームでも、いいプレーだと「シェーン」（すばらしい）と拍手が起きます。他の国ではないことで、お客さんはサッカーをよく知っている。ただ今回のお客さんは関係ないところで拍手がおこるし、やみくもにウェーブがおこる（笑）

中塚：普段ブンデスリーガを見に来ている強面の人とは違う人たちが見に行ってたのでは？

参加者：それはあると思います。

浅野：結構地元の方に招待券が出てたのでは。ブンデスリーガに来ている人たちではなかったですね

牛木：3日前にFIFAからスタッツが届いていました。それを見て知ったのですが、なでしこは優勝賞金100万\$になっているのですが、それはどうなるのか？ それ以外にも基礎的な配当があります。

○コパアメリカ体験記

中塚：せっかく旅物語が続いているので、アルゼンチンに行った笹原さんの話も聞かせてください。

笹原：アルゼンチンで日本のユニを着ていたのですが、声はかけられませんでした（笑）。一回声をかけられたのですが、「お前たちはインヴィテーション出したのに来なかったじゃないか」と（笑）。あと、なでしこが勝った事は随分言われました。

運営ですが、説明は全てスペイン語。外国人はチケットを取りに行く時も地元のスタジアムにある都市しかない。3位決定戦の時は、言われた場所にタクシーで行ったら場所が違っていた。同じような人が他にもいました。あとペルーとチリの試合に行ったのですが、チケットに座席が書いてないんですね。警備の人に言ったら「向こうはチリ、むこうはペルー」と言われるだけ。

アルゼンチンが負けたら街は全然盛り上がりがない。決勝戦は、河の向こうがウルグアイで、そこまで船で行きましたが、さすがにそこは盛り上がりがありました。それを市庁舎の前のパブリックビューイングで見ました。

観戦マナーですが、むこうはマテ茶を飲むのですが、片手に瓢箪でできたコップ、片手にポットを持っている。市庁舎の前も皆さん両手に持っていて、異様な雰囲気でしたね（笑）。もちろん優勝して大盛り上がりでした。

あと余談ですが、冬服を入れていたスーツケースが届かず、大変な思いをしましたね。

中塚：2014年のブラジルW杯も冬なので、皆さん服装には注意しましょう。

では最後に加納さんから。

加納：先程から話に出ている地方都市という概念なのですが、ドイツは日本のように一極集中じゃないんですね。基本的に州独自のやり方は、地方都市がしっかりしていることが、元々ドイツの地盤としてあるんですね。また、ドイツで女子チームを立ち上げる時の話ですが、大企業は見向きもしてくれないから地元の中小企業をスポンサーにしてやるんだという話を聞いたことがあります。男子並のことを考えるのではなく、地域に密着しています。

中塚：サロンの月例会で女性のスポーツを扱ったのは今回が初めてかもしれません（注：これは間違い）。これを機会に女性会員率がアップしてくれることを望みます（笑）。

加納さん、浅野さん、牛木さん、本当に有難うございました。

以上。続きは「ルン」